

機関番号：14501

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2009～2010

課題番号：21730411

研究課題名 (和文) パーソンズ社会学理論を基盤とした生命医療倫理の創成に関する研究

研究課題名 (英文) Theoretical study on innovation of biomedical ethics based on Parsons' sociological theory

研究代表者

田村 周一 (TAMURA SHUICHI)

神戸大学・大学院人文学研究科・学術推進研究員

研究者番号：50467643

研究成果の概要 (和文)：

パーソンズ社会学理論を基盤としながら、現代社会の生命医療倫理の再構成・創成に向けて、今日における実践的な応用可能性を示すことにおいて一定程度の成果を得た。パーソンズの晩年期の理論構成の解明、メディアとしての健康概念の理論的布置、医療生命倫理の現代的な再解釈において、学術的に前進させることができた。社会学理論の古典としてのパーソンズを現代社会の状況から問い直し、その結節点を示した点で、今後の学術的發展に一定の意義をもつものである。

研究成果の概要 (英文)：

This study was able to obtain the following results: to explore possibilities of practical application of Parsons' sociological theory in nowadays toward reconstruction and innovation of biomedical ethics of contemporary society. It was able to be made to step forward academically in an explication of the theoretical constitution of the late term of Parsons, considerations on theoretical configuration of the concept of health as media, and reinterpretations of biomedical ethics theory. This study has a fixed and significant meaning to further academic developments for the reason to review Parsons' sociological theory as one of classics a viewpoint of contemporary society, and to indicate some relevance to it.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：社会学理論、タルコット・パーソンズ、医療社会学、生命倫理、医療倫理

1. 研究開始当初の背景

本研究に関連する領域の背景としては、と

くに以下の三つがある。

(1)タルコット・パーソンズ社会学理論

に関する世界的な研究動向である。第二次世界大戦後の世界的受容期、その後の厳しい批判期を経て、近年では理論の潜在的有効性と今日的活用を積極的に検討する試みがある。いわゆる「パーソンズ・ルネッサンス」という学術的動向で、本研究もこうした潮流に倣差すものである。

(2) パーソンズの理論研究のなかでも、とりわけ医療社会学の成果を晩年期の論稿から問い直す研究動向がある。パーソンズによる病人役割概念の提唱は医療社会学における最大の貢献とされてきた反面、後代しばしば誤解されてきた。この病人役割概念を中心とした理解は、後期から晩年期にかけての展開を視野に入れていないという問題が指摘されている。日本国内では高城和義、海外においてはE・テリアキアンらの指摘がそれにあたる。本研究も、こうした立場と軌を一にするものであり、研究蓄積に乏しい晩年期の発展に焦点を合わせ、パーソンズ医療社会学の現代的可能性を明らかにしようとするものである。

(3) 現代社会における医療問題に対する学問的要請がある。現代医療の現状として、高度医療技術が日々進歩を遂げる中で、技術の運用に関する制度的枠組および倫理的基盤をめぐる議論は常に後追い状態にあると言える。臓器移植と脳死判定、安楽死、尊厳死、ターミナルケア、クオリティオブライフ、再生医療、遺伝子治療について多様な立場から議論が交わされているが、これらは倫理に深く関わる主題であるため、ローカル社会の文化的伝統や生命観を踏まえた議論が強く求められる。この問題系を論点整理する理論的枠組が必要とされている。

本研究の問題関心は、こうした時代的かつ

学問的要請に立脚した上で設定されるものである。

2. 研究の目的

研究の全体構想としては、タルコット・パーソンズの社会理論を理論的手がかりとして、新しい生命医療倫理の創成プロセスを理論化することである。具体的な研究内容は以下の三つから構成される。

(1) 基礎研究として、パーソンズの世界論、とくに晩年期の医療論の現代的応用可能性を明らかにすること。

(2) 今日の先端医療研究と並行する新しい生命医療倫理の創成プロセスについて社会学の観点から論点整理し、(1)の成果をもとに医療社会学理論の構築を試みることに。

(3) 発展的には、(1)の理論的基盤と(2)の理論化を軸としながら、新しい医療倫理・生命倫理の創成に関する議論を持続的に発展させ、国際的汎用性の高い水準に引き上げる。

本研究は、とくに上記(1)から(2)を射程とし、生命医療倫理の創成プロセスの社会学理論を構築することを目的とする。(3)については、医学・法学・宗教学・哲学・人類学など多様な学問領域が関係するという点で、本研究の延長線上に位置するものであり、医療問題の現代性および緊急性を考慮して、本研究で得られた知見から議論の充実を図る予定である。

3. 研究の方法

パーソンズ社会学理論の内在的理解を深

めつつ、その限界と意義を明らかにしたうえで、とくに現代的応用性に着目する。その方法として、とくに先行研究の蓄積に乏しい後期～晩期の論考を検討、未公刊資料の活用により理論的研究を進めた。

(1)本研究では、「人間の条件パラダイム」を中心とした後期パーソンズを対象とし、集中的な研究を行った。なかでも医療の「不確実性」への問題意識、「メディアとしての健康」概念をはじめとするシンボリックメディア論、専門職論に注目しながら、現代社会における諸課題との関連性について検討するものである。

(2)また本研究は、パーソンズの未公刊資料を積極的に活用するという方法で進めるものである。近年、ハーヴァード大学に残されている未公刊資料の重要性が指摘されている。ただし、その全体を体系的に整理・解明するまでには至っていない。こうした未公刊資料の渉猟にもとづき、宗教社会学、哲学、神学、身体論、医学・医療といった領域との影響関係を検討することを試みるものである。

4. 研究成果

(1)パーソンズの晩年期については、とくに「人間の条件パラダイム」についての検討を進め、諸概念・理論構成を明らかにした。ここではとくに、宗教に代表されるような強力な文化的な価値基盤が社会連帯及び社会変動に強く作用することが示されており、そこに表れるキリスト教文化及び道具的活動主義の精神はパーソンズ解釈に不可欠な要素であることが確認された。またそれに関連して、中期の社会システム論の構築期において

も、医療及びメンタルヘルスが重要な位置づけをもって組み込まれており、それを基盤に晩年期に展開した健康論・医療専門職論・生命倫理論は現代医療の考察に応用可能であることが見出された。

(2)パーソンズ医療論の根底にある不確実性への問題意識については、彼の社会動態論・規範生成論とも深い結びつきをもち、医療の本質的な限界を指摘するものであった。この前提をもとに展示された病人役割概念は、社会の安定における制度の機能を念頭に置いた医師—患者関係の理念型として理解できることが確認された。

(3)後期パーソンズの医療論については、とくに「メディアとしての健康」概念と、合議制アソシエーションモデルを検討した。

(3)-①メディアとしての健康概念については、その生物学および医学の知識体系と強固に結びついた既存の健康観を相対化する今日的応用性を確認した。またこれはそれまでの相互交換メディア論の展開の上であり、パーソンズが大学組織の分析で見せた理論的手法を医療分析にも適用できることがあわせて明らかになった。こうした解釈をもとにすれば、ときにイデオロギカルな対立となる「医療化」論と「脱医療化」論の双方のスタンスを退け、いたずらに健康不安を招く健康絶対主義の問題性を指摘することができる。

(3)-②合議制アソシエーションモデルについては、現代社会において直面する生命医療倫理問題に対して、医療の外側から積極的に議論に参加する必要を示すモデルとして、今日的意義があることを確認した。医療の不確実性に対して社会全体でいかに対処するか

という問題に対して、社会学の観点から、どのような社会的役割が要請され、既存の専門職も含めてそれらがどのように相互に調整されなければならないかを理論的に研究していくうえで大きな可能性を有する点が明らかになった。

以上のような、とくに不確実性をキーワードにしたパーソンズ医療論の再検討・再解釈は、これまで取り上げられてこなかった領域に光を当てるものであり、先行研究に新たな視点を加えるという点で、一定のインパクトを有するものと思われる。

④また現代社会における生命医療倫理問題の論点整理については、社会学の観点から、ウルリヒ・ベックらの現代社会論を参照にして、以下の諸点を明らかにした。近代化が進展することにより、それまでの社会の基盤そのものが再帰的に揺さぶられる事態を示した再帰的近代化論は、生命医療倫理の領域にもあてはまるものであり、とくにリスク化と個人化は、つねにこれまでにない形で顕在化すると指摘することができる。脳死や遷延性意識障害をめぐる制度的・倫理的問題、安楽死・尊厳死をめぐる死生観の多様化と個々人の選択の問題、遺伝子治療・生殖補助技術とともに出生・生殖に関する社会的問題、再生医療における研究倫理の問題などは、医療の発展により再帰的に立ち現れた問題として、現代社会論の枠組みで理解することができる。

今後はハーバーマスやルーマンなどの現代社会理論の展開を視野に入れ、さらには哲学、宗教学、医学などの生命医療倫理の関連領域との連携をふまえた社会学理論の展開と更新を展望している。本研究では、そのための理論的基盤を整備・構築することができ

たと考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計3件)

①田村周一、健康概念の系譜と展開——パーソンズの古典理論としての意義と限界、第62回関西社会学会大会、2011年5月28日、甲南女子大学

②田村周一、A sociological consideration of brain death and organ transplantation in Japan, The 3rd Workshop on the Encounters of Young Scholars on Asian Studies, 2010年10月23日、神戸大学

③田村周一、Brain Death problem and Cultural tradition in Japanese Society: Application of Legacy of Talcott Parsons' Sociological theory of Medicine [Distributed Paper], 国際社会学会ISA第17回世界大会、2010年7月13日、ヨーテボリ (スウェーデン)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田村 周一 (TAMURA SHUICHI)

神戸大学・大学院人文学研究科・学術推進
研究員

研究者番号：50467643